

平成二十六年入学者選抜試験
個別学力試験問題(前期日程)

国 語

注意

- 一、問題紙は指示があるまで開いてはいけません。
- 二、問題紙は十一ページ、解答用紙は一枚です。指示があつてから確認し、解答用紙の所定の欄に受験番号を記入してください。
- 三、答えはすべて解答用紙の所定のところに記入してください。
- 四、解答用紙は持ち帰ってはいけません。
- 五、試験終了後、問題紙は持ち帰ってください。

一

次の文章を読んで、問いに答えよ。

(この部分につきましては、著作権の関係により、公開しません。)

(この部分につきましては、著作権の関係により、公開しません。)

(この部分につきましては、著作権の関係により、公開しません。)

(この部分につきましては、著作権の関係により、
公開しません。)

(陣内秀信『東京の空間人類学』による。)

(注) カテドラル——キリスト教で、司教の座席(カテドラ)が設けてある司教区を中心となる聖堂。

スカイライン——山や建物などが空を区切って作る輪郭。

マグダ・レヴェツ・アレクサンダー——一八八六〇?。オランダの芸術学者。

塔の思想——一九五三年刊。象徴としての塔、体験としての塔の意味と意義を考察したもの。

ランドマーク——その土地の目印や象徴になるような建造物。

モース——一八三八〇―一九二五。アメリカの動物学者。大森貝塚を発見した。

ランドスケープ——景観。風景。

問一 傍線部1～5を漢字に書き改めよ。

問二 傍線部A「ヨーロッパ都市をいま観光で巡ってみても、コースに含まれる名所はどれも、カテドラルや美術館、広場の
ような人間がつくった建築物ばかりである」について、筆者がこのように述べるのはなぜか、説明せよ。

問三 傍線部B「空間的ヒエラルキー」と同じ内容を表す表現を本文中から五文字以内で抜き出せ。

問四 傍線部C「彼らの、情緒に流れず物事をきちつと論理的に積み上げながら考える思考法も、こういった建物や街を構築
する原理と表裏一体の関係にあると思われる」について、「情緒に流れず物事をきちつと論理的に積み上げながら考える思
考法」と「こういった建物や街を構築する原理」との共通点を説明せよ。

問五 日本の都市の造形に見られる西欧の都市と異なる点を説明せよ。

二

次の文章を読んで、問いに答えよ。

(この部分につきましては、著作権の関係により、公開しません。)

(上野誠『書淫日記―万葉と現代をつないで―』による。なお、本文の一部を省略した。)

問 傍線部の筆者の見解に対してあなたはどのように考えるか。具体例や根拠を示しながら自分の考えを述べよ。(解答は解答欄をほぼ満たす程度とすること。)

(下書用)

--	--	--	--	--	--	--	--

次の文章を読んで、問いに答えよ。

今は昔、小野宮殿おののみやどのの御子に、少将なる人おはしけり。佐理の大式すけまき だいにの親なり。はかなく煩ひて失せにければ、小野宮殿、泣きこがれ給ふ事限りなし。さて、忌み果て方になる程に、この少将の御乳母めのとの、陸奥国むつみのくにの守の妻めになりて行きたりけるが、「若君かく失せ給へり」とも知らず、恋しくわびしきよしを書きて、馬たてまつりたりけるに添へて、御文ごふみまゐらせたりける。返り事、小野宮殿ぞ書きてつかはしける。「その人は、この程に、はかなく煩ひて失せ2にしかば、ここには今まで生きたることをなん、心憂くおぼゆる」とばかり書きて、歌をなん詠みてつかはしける。

まだ知らぬ人もありけり東路に我も行きてぞ過ぐべかりける
と書きてつかはしけるを見て、乳母1、いかなる心地しけむ。

〔古本説話集〕による。

(注) 小野宮殿——藤原実頼。九〇〇、九七〇年。関白太政大臣に至る。

少将なる人——藤原教敏。九四九年、左近少将で没。この時、父実頼は左大臣。

佐理の大式——藤原佐理。九四四、九九八年。大宰大式。三蹟の一人。

忌み果て方——服喪期間が終わる頃。

問一 傍線部1「その人」とは誰か。本文中の語句によって解答せよ。

問二 傍線部2「にしか」の「に」と「しか」の終止形を記せ。

問三 傍線部ア「御文まるらせたりける」を、主語を明らかにして口語訳せよ。

問四 傍線部イ「乳母、いかなる心地しけむ」を口語訳せよ。

問五 波線部「東路に我も行ってぞ過ぐべかりける」は、誰のどのような思いを表しているか。「東路」の意味を明らかにして、その理由とともに説明せよ。

四

次の文章を読んで、問いに答えよ。(設問の都合で送り仮名・返り点を省いたところがある。)

この文章は、蘇軾(北宋の文学者、官僚。一〇三六―一一〇一)が、『漢書』(前漢のことを記した歴史書)「張湯伝」の一節に
関して、時の皇帝哲宗(一〇七六―一一〇〇)に行つた講義をまとめたものである。

「張湯伝」の一節は、大体次のような内容である。

前漢の武帝(紀元前一五七―紀元前八七)の時、匈奴が漢に和平を求めた。武帝の御前の会議で、博士の狄山(生没年不明)は和平に賛成し、御史大夫の張湯(？―紀元前一一五)は反対した。かねて、匈奴征伐を望み、張湯を寵愛していた武帝は、狄山に腹を立て、彼を匈奴との国境に接する要塞にむりやり赴任させた。狄山は赴任後一ヶ月余りで匈奴に殺されてしまった。権力を握つた張湯は、匈奴征伐等の経費をまかなうため、過酷な政治を行つた。そのため流民が発生し、その多くが盗賊となつた。

軾謹按、漢制、博士秩皆六百石耳。朝廷有大事、必与丞相、

御史、九卿、列侯同議可否。蓋親儒臣、尊經術、不下以小臣而廢中

其言。故狄山得与張湯爭議上前。此人臣之所甚難、而人主

之所欲聞也。温顔以来之、虚懷以受之、猶恐不敢言。又況如

武帝作色憑怒、致之於死乎。故湯之用事、致使下盜賊半天下

而漢室幾^{ほとん}乱^レ有^ル以^カ也^ナ夫。

(蘇軾『狄山論匈奴和親』による。)

(注) 博士——五経博士。大学で経書の講義をする官。 秩——俸給。穀物で支払われた。 石——穀物の容量の単位。

丞相——宰相。首相。 御史——官吏の不正を暴いて取り調べる官。その長官が御史大夫。

九卿——九人の主要な大臣。 列侯——諸侯。皇帝から土地の領有を認められ君主になっているもの。

儒臣——儒学で仕える官。 経術——経学。儒学の奉ずる經典に関する学問。 上前——皇帝の面前。御前。

虚懐——虚心。私心を交えないこと。 憑怒——激怒すること。 用事——政治的な実権を握ること。

漢室——漢の朝廷。

問一 波線部 a・b の読みを、送り仮名を含めて、すべて平仮名で記せ。現代仮名遣いを用いてもよい。

問二 傍線部 A「不^テ下^リ以^テ小^{タル}臣^ヲ」而^{シテ}廢^ス其^ノ言^ヲ」を口語訳せよ。

問三 傍線部 B は「張湯と上の前に争議するを得」と読む。これにしたがって返り点を施せ。

問四 傍線部 C「猶恐^レ不^レ敢^テ言^フ」をすべて平仮名で書き下し文にせよ。現代仮名遣いを用いてもよい。

問五 この文章で、蘇軾は皇帝がどのような態度で臣下に意見を求めるべきだと主張しているか。簡潔に述べよ。